書　評

石井　實　著：

『地理写真』

古今書院　1988年３月

Ａ５判　254ページ（写真123枚）　3,500円

「百聞は一見にしかず」という。いくら言葉（文字）で説明しても伝わらないことがある。そのために従来から，地誌には地図や写真が添えられる。本書は，その写真を補助的な手段にとどめることなく，できうればそれだけで十分な地誌となりうる写真を目指して，「地理写真」の可能性と限界を探った意欲作である。

本書の構成は，

序にかえて

Ⅰ．地理写真とは

Ⅱ．イメージ・映像・写真

Ⅲ．日本の地理写真史

Ⅳ．地理写真を読む

Ⅴ．さまざまな地理写真

Ⅵ．器材・撮影・整理・発表

Ⅶ．地理写真をより充実させるために

Ⅷ．写真略史

となっている。これらは，「地理写真」の本質に関する部分とその事例篇（Ⅰ，Ⅱ，Ⅳ，Ⅴ），歴史的考察に関する部分（Ⅲ，Ⅷ），写真撮影に関する様様なテクニックを述べた部分（Ⅵ，Ⅶ），の３部に分けることができる。

第１部は，「地理写真」を，風景，景観，イメージ，映像など，その周辺の概念との関係に注目しながら定義し，地理学的に重要な事象をいかに表現し，いかに伝達するかについて考察する。これは，地理学における＜言語＞の問題と言い換えることもできる。いわば，文字や地図に次ぐ第３の＜言語＞としての写真である。

従来，地理学においても写真が盛んに利用されてきた。様々な地誌における口絵をはじめ，学術論文にも多数利用されている。著者によれば，地理学評論誌１巻から58巻までの論文のうち１割以上の論文に写真が掲載されている。現地調査における写真の利用を考えれば，さらにその数は増すだろう。これらは，主として事実の記録・伝達のために利用されたものがほとんどである。なんらかの形で現実の景観に関わる地理学においては，いかなる分野においても必要な「記録のための手段」である。

しかし，著者は，このような事実の記録の写真から一歩進んで，「地理写真」（衛星写真や空中写真は除く）を人文主義地理学の中に位置づけようとする。ここに著者の真骨頂がある。人間が具体的に様々な体験をしていく景観を写す写真は，具体的で人間の眼に近いこともあり，人間から見た景観を写し出すことができる。現実の中から「生きられる空間」を探りだし，それを写真で表現する。著者は「地理写真」によって，まさに空間や景観に対する「思想の表出」に挑戦する。

このような写真は，それを撮る者に空間や景観に対する一定の見解や地理的洞察と撮影技術を要求するのと同様に，それを「読む」者にも撮影者と同等の力を要求する。そうでなければ，撮影者の意図は，必ずしもそのままには写真を読む側に伝達されなくなってしまう。しかし，写真を読む側に立つときさらに問題となるのは，著者自身が序論でも述べているように，写真が多様な情報を含んでおり，したがって多様な解読も可能になるということである。撮影者にとっての「地理写真」も，読者にとっては「地理写真」ではなくなることもありうるし，その逆もまたありうる。「事実の記録」ならば，「読み」込みを停止するので，写っている事象自体をみればよいが，「思想」となると，多様な解釈はむしろ撮影者には障害でさえある。写真による「思想の表出」には，言語による説明を添えて解読の糸口を示す必要があろう。

もっとも，解読法に関しては，「地理写真」の本質論とも関連する興味ある試みが，第Ⅳ章でなされている。著者は「地理写真」を解読するにあたり，その構造を，弁当や喫茶道具などを配置した写真（著者のいう「モデル」）と対照しながら説明している。説明の仕方も，現実の景観を離れるための著者独自のユニークな方法であるが，それ以上に「地理写真」を構造的に捉える試みは高く評価されねばならない。「地理写真」を構造的に捉えることで，具体的景観に左右されがちな写真に，一般性の表現

と解読の可能性が開けるように思われるからである。しかし，その問題とは裏腹に，写真で「思想の表出」，とくに「生きられる空間」を表現しようとするとき，その場所に特有の事象の表現と解読という新たな課題が登場しよう。

以上をふまえて撮られた「地理写真」の事例が第V章に示されている。そこでは，単に1点の写真によるだけではなく，組写真，時系列に並べられた写真，2地点の同じテーマの写真，季節の違う写真など，提示の仕方を凝らして，著者の意図するところを表現しようとする。しかし残念なのは，これらの写真の解説が，技術論に傾いている点である。「地理写真」の本質論に関する部分で著者が強調していた「生きられる空間」の解説がもう少しあれば，著者の「地理写真」の真価が発揮できたはずである。

第2部では，著者は，「地理写真」の歴史が地理学の大きな潮流と見事に対応していることを指摘する。写真が＜言語＞であるとすれば，その歴史は地理学における＜言語＞の歴史といえる。その意味で，それは特殊地理学史として捉えることができる。景観を研究対象とする景観地理学の時代の隆盛，場所の具体性を廃し，機能を重視し，抽象化を指向する計量地理学以後の衰退，人間の側から空間を捉え直す人文主義地理学における復権，という「地理写真」の歴史は，地理学における＜言語＞の揺れ動きに他ならない。

第3部は，いわば理論的な前2部に対する実践篇である。ここでは著者の経験から生まれたテクニックの一つ一つを懇切丁寧に指導してくれる。現地調査では，そこの景観や遺物，遺跡，さらに資史料等の撮影が欠かせない。それらの写真が研究上の強力な武器になるか無用の長物となるかは，その撮影技術にかかっているとさえいえる。このようにして撮られた写真は，研究資料としての利用に耐えられることはもちろん，著者のいうように，学会発表時などのスライド使用で，「見にくいですが」という言葉をなくすことになるだろう。

本書に収められた写真の中には，戦後間もなくのものも少なくない。著者は『日本地誌』（二宮書店）や雑誌『地理』，さらには『地域を写す 石井賞地理写真集』（古今書院）などで数多くの優れた「地理写真」を発表し，近く2冊目の写真集を刊行されると聞く。長年，「地理写真」を撮り続けた著者の元には，ここに収録されていない貴重な写真があるに違いない。これらは，歴史的にもたいへん貴重である。

写真の歴史もすでに150年，歴史資料として貴重な写真が蓄積されていることであろう。しかもその間の景観の変化は著しい。近年，『百年前の日本』『モースの見た日本』（以上，小学館），後藤和雄・松本逸也編『ライデン大学写真コレクション 甦える幕末』（朝日新聞社），石川光陽『痛恨の昭和』（岩波書店）など，史料としての写真集の出版が相次ぎ，写真の史料としての価値が高まっている。今後，歴史地理学においても，古文書だけでなく，古地図や絵画などとともに，ヴィジュアルな歴史資料として写真の利用が期待されているといえよう。

本書で触れられた写真の解読などの試みは，このような歴史地理学研究における写真利用の課題に答えるための出発点になる。ただ，この点で気になることは，著者が「地理写真」を撮影者の側に立って定義していることである。写真を利用する立場に立てば，撮影者の意図に関わりなく，そこに地理学的に貴重な事象が写っていれば，それもまた十分に「地理写真」とはいえないだろうか。これまでに蓄積され，今後もさらに蓄積される写真を史料として取り込んでいく可能性を考えるとき，その定義を限定しない方がよいと考える。

ともあれ，本書の価値は，第1にその写真にある。長年の経験に基づいた，本書に掲載された100点を越える写真は，どれも十分に「読み」ごたえがあり，言語に尽くせない説得力がある。それを言語で評することの矛盾を感じながら筆を置くことにする。

（青山宏夫）

福井市　編：

『福井市史　資料編別巻　絵図・地図』

福井市　1989年3月

A4判　268ページ　8,100円

近年，自治体史のなかに絵図資料集を加える例が多くなったことは，すでに本誌143号において橋本直子氏が『都留市史 資料編 都留郡村絵図・村明細帳集』の書評のなかで指摘している。本書もまた，こうした意欲的な自治体史のひとつであり，同時に歴史地理学にとって関心の高い土地柄ゆえに，まさに待望の絵図資料集の刊行となった。

昨今の自治体史の絵図資料集は，その編集にさまざまな工夫が凝らされるようになっている。この点